第20回連合駿台会学術賞・学術奨励賞

【駿台懇話会の目的】
明治大学と連合駿台会が相互の情報交換と親睦を図り、母校の教育振興と地域社会の発展に寄与することを目的とする。

1．連合駿台会学術賞

該当者なし

2．連合駿台会学術奨励賞

【人文科学】竹中克久（たけなかかつひさ）（情報コミュニケーション学部専任講師）
『組織の理論社会学
―コミュニケーション・社会・人間―』

【自然科学】矢野健太郎（やのけんたろう）（農学部専任准教授）
『The Tomato Genome Sequence Provides Insights into Fleshy Fruit Evolution. Nature. 485, 635−641』

【自然科学】小池裕也（こいけゆうや）（理工学部専任講師）
『固相ディスク捕集/
ガンマ線スペクトロメトリーによる
雨水中の短寿命放射性核種分析』

連合駿台会報
No.314 平成26年3月15日発行
発行・編集 連合駿台会
発行人 広報委員長・齋藤柳光
編集人 事務局・矢嶋まゆ子
〒101-0052 千代田区神田小川町三―二二
明治大学「紫紺館」内
電話（〇三）三二九六―四七四七
印刷 有限会社 美創

〈左から〉山口政廣会長、竹中克久先生、日高憲三理事長、矢野健太郎先生、福宮賢一学長、小池裕也先生

連合駿台会学術奨励賞を授与

新春の駿台懇話会（一月例会）

平成二十六年最初の連合駿台会例会（駿台懇話会）を、一月二十二日（水）十七時半より、明治大学リバティタワーで開催しました。

山口政廣会長の挨拶に続いて、学術奨励賞三人の名前およびその選考経過が発表されました。そして受賞者を記念して、竹中克久・情報コミュニケーション学部専任講師の受賞記念講演がありました。

講演の要旨は以下の通りです。

＊

「組織のメタファー　～舞台としての組織～」

はじめに

ただいまご紹介にあずかりました、情報コミュニケーション学部の竹中克久と申します。このたびは、明治大学人文科学研究所叢書として刊行されました『組織の理論社会学――コミュニケーション・社会・人間』に対しまして、権威ある連合駿台会学術奨励賞を賜り光栄の至りに存じます。本日は拙著で展開いたしましたメタファー論から見る組織像についてお話をさせていただきます。

1　組織とは何かという問い

組織論においては、常に以下の二つの問いが存在します。一つは、組織をいかにマネジメントするか、というもの、これには経営学、経済学を中心としたアプローチが採用されます。もう一つは、組織とはそもそも何か、という問いです。これには理論社会学を中心としたアプローチがとられ、拙著ではこのアプローチを重視しました。

また、組織論には二つの大前提があります。一つは「組織は客観的で静態的な事物である」というもの、もう一つは「組織は秩序を伴う存在である」というものです。しかし、こういった大前提を踏襲すると、組織を常識的に理解することしかできません。そのため、拙著では「組織は当事者の主体的なコミュニケーションから創造され、組織の秩序は当事者のコミュニケーションから可能になる」というスタンスを選択しました。それは、前提を疑い、常識的な考えを排することによって組織の「真の姿」を説明することが重要になってくると考えたからです。そのためには組織のメタファー（隠喩）の転換がカギとなると考えました。

2　組織のメタファー

さて、メタファーとは研究手法としてどういう意義を持っているのでしょうか。端的には、何かを別のものに喩えることで、常識的・日常的な理解を超えて、全く新しい発想を可能にさせるものだと言えます。例えば、ヒンドゥー教の寓話で「群盲象を評す」というエピソードがあります。目の不自由な人々が象をさわり、どのような動物であったか王に報告するというエピソードなのですが、足を触ってきた者は「象は柱のような動物だ」と答え、耳を触ってきた者は「象は団扇のような動物だ」、そして鼻を触ってきた者は「象は太いロープのような動物だ」と答えます（Hatch and Cunliffe, 2006）。このエピソードは一つの考え方に固執すると、ほかの考え方ができなくなるということを示唆しています。これは組織という研究対象を語る場合も同じではないか、と考え研究を進めました。

組織のメタファーには数多くのものがあることを、G・モーガンは指摘しています（Morgan, 1998）。ここでは、機械、生物、舞台という三つのメタファーについて述べようと思います。まず、組織を機械に喩えてみます。そうすると、組織は誰に対しても同じように反応し、誰に対してもシステマティックにサービスを提供する機械であり、その組織では人間を単なる歯車として想定する、という組織の側面が強調されます。チャップリンの『モダンタイムス』で描かれたのはこの側面です。次に組織を生物に喩えてみましょ

う。そうすると、組織はその中であたかも細胞のように存在する個人が成長しながら、組織それ自体も成長と衰退を繰り返す有機体であり、人間の集合体であるはずの組織は、それ自体が生物のように、自身の動学によって作動するという側面が強調されます。生物というメタファーは、多くの企業組織が不祥事をおこしてしまうという現象の理解に適しているかもしれません。最後に、組織を舞台に喩えてみます。組織とは、個人が与えられた役割を果たす舞台であり、演者は与えられた脚本通りに演じることと同時にアドリブも重視される、という側面が抽出されます。しかし、舞台自体がつまらないものだと、観客はいなくなるということも事実です。このメタファーは、組織内部で演者たちがコミュニケーションを遂行しながら秩序を形成し、また舞台として組織外部にその公演が発信されるという、現代の情報社会に特徴的な組織の姿をとらえるのに適していると考えました。表にまとめると【表1】のようになります。

3 舞台としての組織

拙著では、組織を舞台としてとらえ、理論構築を進めていきました。「舞台としての組織」という組織像は、①組織は当事者間の主観的なコミュニケーションによって絶えず再生産される動態的なプロセスである、②組織に秩序が備わっているのではなく、当事者の努力とコミュニケーションによって秩序が形成・解体されるプロセスを分析できる、という有効性をもっています。

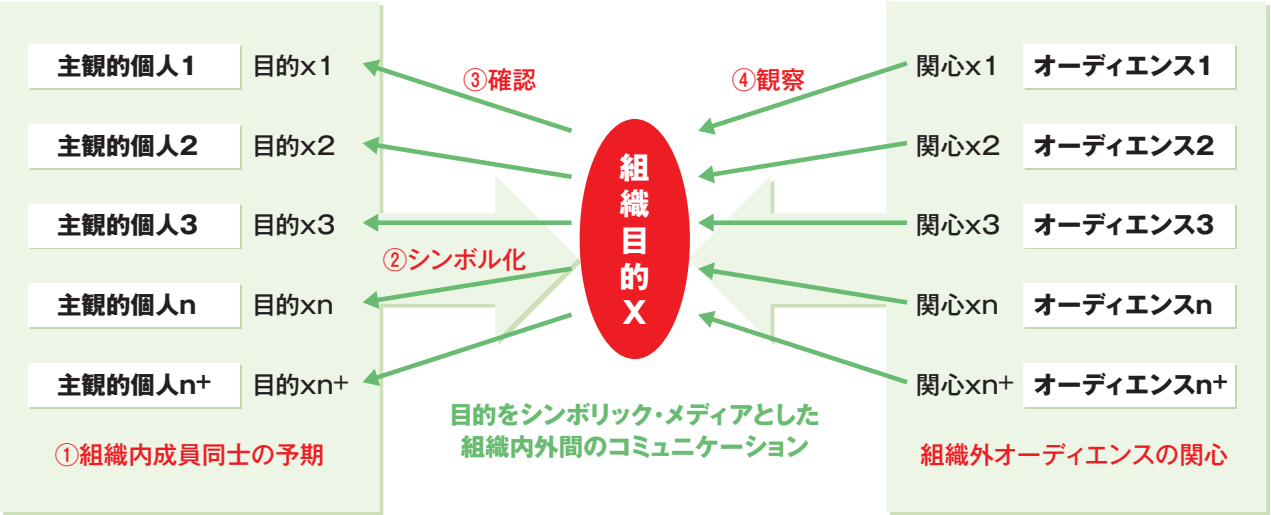
舞台としての組織の中では、当事者たちは何を生み出しているのでしょうか。組織の秩序をコミュニケーションの安定化した状況として考えてみます。そして、コミュニケーションの安定化のためにはシンボリック・メディアが必要になると考えられます。主観的な個人の準拠点（判断基準）だけでは、互いの行為を予期することができません。主観的な個人に還元され得ない、第三者の準拠点を獲得するには、シンボリック・メディアが必要となるのです。舞台における脚本と考えても良いかもしれません。組織論の場合では、組織目的・組織戦略・組織構造・組織文化という概念がそれにあたります。これらの概念は、理論的にも経験的にも、組織にとって所与のものとして扱われてきました。拙著では、これらを組織に備わっているものと考えずに、当事者が作り出すシンボリック・メディアとして再定義しました。そして、組織目的を「組織のメンバーが共同利用する道標」、組織戦略を「道標に向かうための計画書と地図」、組織構造を「計画をうまく遂行するための役割分担」、そして組織文化を「なぜその旅に向かうのか、ということを価値づける使命感」と位置づけました。本日はこのうち、組織目的【図1】と組織文化【図2】について詳しく見ていきたいと思います。

まず、組織目的について表された【図1】から見ていきましょう（竹中，2013: 198）。

表1　組織のメタファー

組織のメタファー	人間のメタファー	暗黙の組織像	組織の境界
機械	歯車	静態的事物 Organization	閉鎖的
生物	細胞	静態的事物 Organization	閉鎖的
舞台	演者	動態的プロセス Organizing	開放的

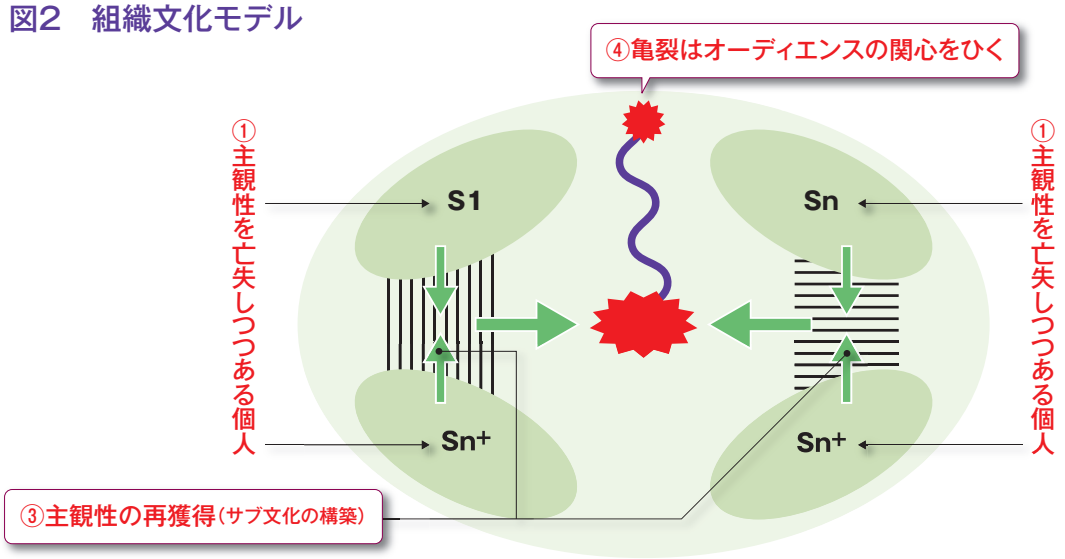
図1　組織目的モデル



図の左側には主観的な個人が集まっています。ただ、この時点では、相手の行動を予測し、安定的なコミュニケーションを行える状態ではありません。そのため、相手の行動を互いに予期しあうようになります（①）。この予期を繰り返すうちに、シンボリック・メディアとして組織目的が形成されます（②）。その組織目的からの距離によって、メンバーは自らの役割や位置づけを確認できるようになります（③）。最後に、組織の環境にいるオーディエンスはこの組織目的を観察しています（④）。このように組織目的は組織の成員間だけでなく、組織の内部―外部をも媒介する二重のシンボリック・メディアとして機能しているのです。

次に、組織文化について描かれた【図2】をご覧ください（竹中, 2013: 227）。メンバーは集まるなかで、共通の文化・同じ価値観を構成することがあります。ところが、一枚岩的な組織文化のなかでは、個性を発揮することができません（①）。そのため、いくつかのグループに分かれ、新たな文化や価値観をサブカルチャーとして創造することがあります（②）。ところが、ときにこのサブカルチャーは対立を生み出します（③）。しかもその対立から生じた亀裂が組織の表面にあらわれるようになると、再びその組織は外部のオーディエンスから観察されることになりま

図2　組織文化モデル



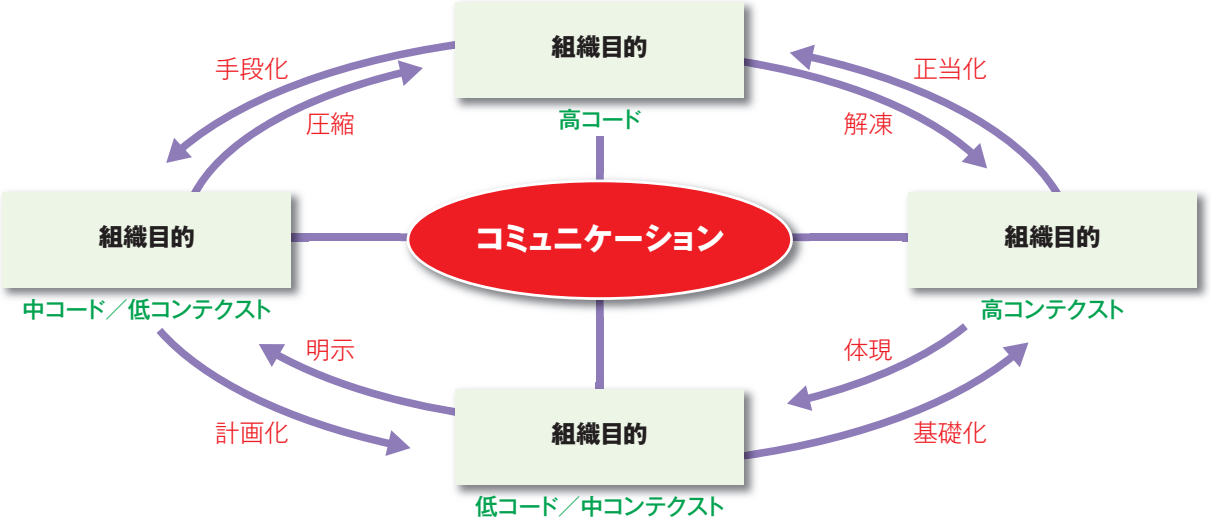
す（④）。その結果、信用できない組織だと判断されれば、その組織の存在は支持されなくなります。

4 シンボリック・メディアのダイナミック・ループ

さて、シンボリック・メディアとしての組織目的と組織文化についてお話をさせていただきましたが、最後に組織戦略や組織構造との関連を示したいと思います。次の【図3】をご覧ください（竹中，2013: 86）。

まず、時計回りのプロセスから見ていきます。組織文化というものは、もっともシンボル化の程度が低い高コンテクストなものであると考えられます。これは、成員間に分有された暗黙の価値観、いわば「雰囲気」とでもいうべきものであるので、もっとも多様に解釈可能な情報を含んでいるものです。しかし、当事者にとってはもっとも活き活きとした主観的リアリティという感覚を産み出すものでもあるます。次に、組織構造は、その組織文化を体現したものと考えることができます。いわば「人工的」で「可視的」な役割配列としてこれらは現れ、そのシンボル化の程度は組織文化に比べて少し高くなります。そして、組織戦略はその組織構造を明示したものです。何らかの計画としてこれらは明文化され、そのシンボル化の程度はさらに高くなります。最後に、組織目的はその組織戦略を一言で言い表せるほどに圧縮して成立しています。ここでは、シンボル化の程度は最高となりますが、その組織目的は再び組織文化というかたちに解凍され、当事者たちに主観的リアリティとして解釈されてゆくことになります。

図3 シンボリック・メディアのダイナミック・ループ



次に、反時計回りのプロセスについて説明します。組織目的と組織戦略の関係はそのまま目的―手段図式にあてはめて考えることができます。目的の実現のために、戦略が手段として選択されるのです。また、組織構造はその戦略を計画立てて行うためにもっとも合理的なかたちで形成されます。そして、その組織構造は組織アイデンティティの源泉でもある組織文化によって基礎付けられます。また、この組織文化はその組織にとって正当な組織目的を形成しているか、常にモニタリングすることになります。

さて、組織構造を変化させることは難しい、という話をよく耳にします。組織の成員のほとんどが無駄であり効率が悪いといった事柄もなかなか変わることはありません。それは、組織構造が独立して存在しているわけではないからです。伝統を重視する組織文化や、手堅い組織戦略を選択し続けるといったことが変化しない限り、組織構造だけが変化するということはないのです。まず、組織を

形成するコミュニケーションを変化させること、そしてそこから生まれ出るシンボリック・メディアとしての組織構造を変化させる必要があるのです。

5 おわりに

さて、本日の話を振り返ってみたいと思います。私が拙著で展開した理論で強調したいのは以下の点です。まず、組織という名詞は存在しないということです。存在するのは組織化という動名詞＝進行形だけなのです(Weick, 1979, 1995)。そして、コミュニケーションを安定化させたい当事者たちは組織秩序を求めて、その動名詞のなかでシンボリック・メディアを作り出すということです。そして、そのシンボリック・メディアは、内部の当事者間でコミュニケーションを媒介するだけでなく、組織とその外部のオーディエンスとの間をも媒介するということです。そのように考えるためには、組織を舞台に喩えることが重要となってくるのです。

現代社会では、誰もが組織に所属したり関与したりせずに社会生活を営むことはできません。しかし、組織とは何か、という根源的な問いはほとんど発せられることはありません。拙著のような試みが、組織論をはじめ社会科学の発展に貢献できれば幸いです。

ご清聴ありがとうございました。

【文献】

- Hatch, M. J. and Cunliffe A. L., 2006, *Organization Theory:Modern, Symbolic, and Postmodern Perspective, second edition,* Oxford and New York:Oxford University Press.
- Morgan, G., 1998, *Images of Organizations: The Executive Edition,* Thousand Oaks, Calif.:Sage publications.
- 竹中克久, 2013,『組織の理論社会学――コミュニケーション・社会・人間』文眞堂.
- Weick, K. E., 1979, *The Social Psychology of Organizing.*(Second edition), Mass.:Addison-Wesley Publishing Co., Inc.(＝1997, 遠田雄志訳『組織化の社会心理学(第2版)』文眞堂.)
- ――――, 1995, *Sensemaking in Organizations,* Thousand Oaks, Calif.:Sage Publications. (＝2001, 遠田雄志・西本直人訳『センスメーキングインオーガニゼーションズ』文眞堂.)

◆新入会員ご紹介

前回までの理事会で承認され、入会された方をご紹介します。

(敬称略・到着順)

宮澤(みやざわ) 光晴(みつはる)
昭和五十四年・工学部卒
アズビル㈱
執行役員常務・東京本店長
東京都世田谷区在住

長瀬(ながせ) 幸泰(ゆきやす)
昭和五十四年・工学部卒
㈱ナガセインテグレックス
代表取締役社長
岐阜県岐阜市在住

◆訃報

会員の永塚昇氏(昭和三十四年・法学部卒、弁護士)が、平成二十六年一月二十二日に逝去されました。享年七十八歳。

ご冥福を心からお祈り申し上げます。

◆明大ニュース

●入試志願者数八年連続十万人超

二〇一四年度の明治大学入学試験は、三月四日出願締切の大学入試センター試験利用入試(後期日程)を除く試験日程を終えた。

推薦・特別入試を除く一般入試の志願者数は二月末現在で十万四千五百五十三人となり、八年連続で十万人の大台を超えた。今回の入試では一部の試験日程で記録的な大雪となり、明治大学では試験開始時間の繰り下げや入学検定料返還などの特別措置を講じた。

●新エネルギーとして期待「表層メタンハイドレートの資源化を目指して」

明治大学は一月二十三日、産業技術総合研究所と共同で、フォーラム「表層メタンハイドレートの資源化を目指して」を駿河台キャンパス・グローバルホールで開催した。

メタンハイドレートは、メタンやエタンなどの炭化水素ガスと水分子がつくる氷状の固体物質。火をつけると燃焼するため「燃える氷」とも言われ、発電や都市ガスに利用できる新たなエネルギー資源として注目されている。水深一〇〇〇～二〇〇〇㍍の海底からさらに二五〇～三〇〇㍍下の砂層に存在する「砂層型」と、水深五〇〇～一〇〇〇㍍の海底面から海底下数一〇㍍までの表層付近に塊状の集積体で発見される「表層型」がある。前者は南海トラフと呼ばれる太平洋側で見つかっているのに対して、後者は日本海に広く分布する。

●税理士試験に二人が現役合格

二〇一三年度の税理士試験の合格者が昨年十二月十三日に発表され、商学部四年の安福崇身さんと菊池諒さんの二人が現役合格を果たした。国税庁の発表によると、今年度の最終合格者は九百五人。このうち、大学在学中の合格者は全国でわずか三人で、そのうち二人が明大生だった。

同試験では、全十一科目の中から五科目に合格する必要があり、二人は必須科目の簿記論・財務諸表論のほか、法人税法・消費税法・相続税法の三科目を選択受験し、合格した。

●野球部・前副将が踏切で女性を救出 京王電鉄から感謝状

踏切内に取り残されていた女性を救出したとして、体育会野球部前副将の原島巧さん（農4）が一月二十日、京王電鉄より感謝状を授与された。原島さんは昨年一月二十四日、野球部合宿所近くの府中―東府中駅間の線路脇を自転車で走行していたところ、警報機が鳴り、遮断機の下りている踏切内に女性がいるのを発見。府中方面から電車が近づいてくるのが見えたため、女性を抱えて踏切外へと助け出した。

●OB社長

▽タンガロイ（機械）＝木下聡氏（一九八八年工学研究科修士課程修了・五十歳、三月十七日就任予定）

▽日東電工（化学）＝高崎秀雄氏（一九七八年商学部卒・六十歳、四月一日就任予定）

▽佐藤商事（卸売業）＝永瀬哲郎氏（一九八二年法学部卒・五十六歳、四月一日就任予定）

▽テイツー（小売業）＝寺田勝宏氏（一九九〇年商学部卒・四十七歳）

▽プリンセストラヤ（小売業）＝梅田博章氏（一九七五年商学部卒・六十一歳）

●OB市長・町長

▽千葉県匝瑳市長
太田安規氏（無所属②、一九六六年商学部卒・六十九歳）

▽千葉県四街道市長
佐渡斉氏（無所属②、一九七八年政経済学部卒・六十歳）

▽茨城県境町長
橋本正裕氏（無所属㊨、二〇〇六年ガバナンス研究科修了・三十八歳）

▽富山県立山町長
舟橋貴之氏（無所属③、一九八八年商学部卒・四十八歳）

●阿久悠作詞賞 佳作三人を表彰

第五回連合父母会文学賞の表彰式が二月二十日、駿河台キャンパス紫紺館で開かれ、

阿久悠作詞賞の佳作に選ばれた三人に賞状や記念品が授与された。今回は、倉橋由美子文芸賞は大賞・佳作ともに該当者なし、阿久悠作詞賞は大賞が該当者なしだった。

倉橋由美子文芸賞に十六編、阿久悠作詞賞に五十八編の応募が寄せられ、文芸賞の選考は、管啓次郎理工学部教授（詩人）、中村和恵法学部教授（著作者）、越川芳明文学部教授（翻訳家）が、作詞賞の選者は昨年同様、エイベックス・エンタテインメント顧問の飯田久彦氏が務めた。

○第五回明治大学連合父母会文学賞

▽第一部門（倉橋由美子文芸賞）

大賞・佳作　該当者なし

▽第二部門（阿久悠作詞賞）

大賞　該当者なし

佳作　「ルービックキューブ」向田真（文1）、「季節がわたしをおぼえてる」福永真梨佳（文4）、「風琴の唄」大木夏子（文1）

●図書館書評コンテスト
受賞者十二人を表彰

明大生が書評を競う「第四回明治大学図書館書評コンテスト」の表彰式が二月三日、駿河台キャンパス中央図書館で行われ、最優秀賞を獲得した三浦直人さん（文3）をはじめ、十二人が表彰を受けた。

このコンテストは、明大生の読書への関心を高めることや、積極的な図書館活用を促すことを目的に企画しているもので、参加者は本学図書館が所蔵する本から一冊を選び、八百字以上千二百字以内で作品を批評する。四回目にあたる今回は、三十六作品の応募があった。

●スポーツ奨励奨学金　百三十四人に交付
さらなる飛躍を期待

スポーツで卓越した成績を収めた者に給付する「スポーツ奨励奨学金」の二〇一三年度給付者が決定し、明治大学体育会三十四部の学生百三十四人に奨学金を交付した。

この奨学金は、スポーツと学業の両立を促し、明治大学のスポーツ活動の高度化・活性化の促進を目的に、体育会運動部に所属する学生に給付するもの。国際的なレベルの顕著な競技成績や、本学の名声を高めた者およびスポーツ活動で優秀な競技成績を収め、経済的支援を必要とする者に与えられる。給付金額は年間の授業料相当額。

●政経学部・勝ゼミ
証券ゼミナール大会で優秀賞

全日本証券研究学生連盟が主催する「証券ゼミナール大会」（日本証券業協会後援）が昨年十二月十三～十四日、東京の国立オリンピック記念青少年総合センターで開かれ、政治経済学部・勝悦子ゼミナール三年生四人のチーム（石井達也さん、石井利樹さん、外谷隆則さん、福地陽介さん）が第四テーマ部門で優秀賞を受賞した。

この大会は、金融・証券に関する問題を理論的・実証的に研究するとともに、加盟大学間相互の交流による証券研究の発展・推進を目的としたもの。

●商学部・千田ゼミ
政策フォーラムで最優秀賞

ＩＳＦＪ日本政策学生会議主催の政策フォーラム 決勝プレゼンテーションが昨年十二月一日、日本赤十字看護大学（東京都渋谷区）で開かれ、商学部千田亮吉ゼミナール三年生五人のチーム（倉茂卓真さん、金泰完さん、後藤秋桜子さん、土橋崚平さん、金谷亮佑さん）の政策提言論文「高齢化時代におけるリバースモーゲージの普及に向けて」が最優秀賞を獲得した。

ＩＳＦＪ日本政策学生会議は、学生が将来の日本のために必要な政策を考え、公表することを目的とした非営利の政策シンクタンク。運営はすべて学生の手によって行われ、多くの大学教員、シンクタンク研究員、政策担当者らが論文の査読者等として協力している。

●経営学部・菊地ゼミ
「学生観光論文コンテスト」で優秀賞

経営学部の菊地端夫ゼミナールの三年生四人（森山真稔さん、大浅希衣さん、野原紬さん、柳橋理子さん）が、「第三回学生観光論文コンテスト」で優秀賞（日本ナショナルトラスト会長賞）を受賞し、その表彰式が二月十八日に東京ビッグサイトで行われた。

同コンテストは、学生の観光事業に対する興味・関心を高め、観光業界を見渡す広い視野を養うことを目的に、日本ホテル教育センターなどが企画したもの。あらかじめ設定された三つのテーマから一つを選択、作成した論文内容を競う。今回は六十二編の応募の中から最優秀賞一編、優秀賞二編が選ばれた。

●商学部・菊池ゼミ
コカ・コーラ社長に事業提案

商学部の菊池一夫ゼミナールの四年生十四人は昨年十二月十八日、六本木にあるコカ・コーラカスタマーマーケティング社を訪ね、井辻秀剛社長らを前に、卒業論文としてまとめたマーケティング戦略提案を行った。

短時間ながらも内容濃い提案を聞き終えた井辻社長は、学生ならではの新鮮な発想を称えるとともに、マーケティングを研究したという「志」を持って社会へ巣立ってほしいと、若きマーケターたちにエールを送った。

菊池ゼミでは、二年次から流通業（小売・卸売）のマーケティング戦略の基本について研究を行い、公に向けて積極的な成果報告（＝社会還元）を行っている。今回は、四グループに分かれて具体的なコカ・コーラ社の製品を取り上げ、マーケティング戦略や売上予測、今後の展開までをまとめ、提案した。

●JMOOCが新春講演会を開催

日本オープンオンライン教育推進協議会（以下JMOOC）は二月三日、駿河台キャンパス・グローバルフロントで新春講演会「オープン教育の未来を拓く日本発MOOCの展開」を開催。予定を大幅に上回る約三百人が会場を訪れ、メイン会場のグローバルホールに隣接する多目的ホールも開場して中継でつないだ。MOOC（ムーク）は、英語のMassive Open Online Courses の略。世界的な有名大学や著名教授の講義がネット上に無料で公開され、世界のどこから誰でも受講ができることなどから、新たな教育サービスとして国内外で注目を集めている。

●社会の各分野で活躍する団体・個人に給付

さまざまな分野で顕著な成果を挙げた学生や、新規活動に挑戦しようとする学生を対象にした「明治大学創立者記念奨学金」の二〇一三年度の採用者がこのほど決定し、二団体・十七人に給付することとなった。

●校友会東京都南部支部
発祥の地・記念碑祭

校友会東京都南部支部は一月十一日、明治大学発祥の地である東京都千代田区有楽町で「明治大学発祥の地・記念碑祭」を開催した。日高憲三理事長、福宮賢一学長をはじめ大学役員や校友ら約九十人が出席。今年は、創立者の一人で明治法律学校（明治大学の前身）の初代校長だった岸本辰雄先生の子孫も初めて参加した。

●大学基準協会に大学評価を申請

二〇一四年度大学評価申請用の「自己点検・評価報告書」草案が二月十四日、大学基準協会に受理された。三月に二〇一四年度大学評価に正式に申請する。大学評価は、各大学が実施した自己点検・評価を基に行う第三者評価。学校教育法などで七年に一度、大学基準協会などの認証評価機関による評価（認証評価）を受けることが義務付けられており、本学は前回二〇〇七年度に受審している。

●明大出身政財界人との懇談会を開催

ヒューマンネットワークの強化や情報交換を目的に、明治大学は二月二十六日、本学出身の政財界人との懇談会を駿河台キャンパ

ス・リバティタワーで開催。国会議員や首長、各種企業の社長と本学関係者ら約五十人が一堂に会した。

懇談会は二部構成で進行し、リバティホールで行われた第一部の報告会では、本学の今を紹介する映像の上映に続いて、日髙憲三理事長と福宮賢一学長がそれぞれ、出席者へのあいさつと報告を行った。

●世界に広がる協定校
四十ヵ国・地域二百三十大学と協定

明治大学は、国際連合食糧農業機関との協力協定を、オーデンシア・ナント経営学院、パリ・カトリック大学パリ電子工学院と部局間協力協定を新たに締結した。協定校は四十の国と地域で、二百三十大学（学部間協定など含む）となった。

●カナダ・ケベック州貿易大臣らが来訪

カナダ・ケベック州政府のジャン＝フランソワ・リゼ国際関係・仏語圏・貿易大臣、クレール・ドゥロンジェ同州在日事務所代表らが一月二十二日、駿河台キャンパスを訪れ、飯田和人教務担当常勤理事、伊藤光副学長（総合政策担当）、大六野耕作政治経済学部長らと懇談した。この表敬訪問は、ケベック文庫の設置・運営やケベック講座の開講など、同州に対する理解を促進する本学の取り組みに対して謝意を表すために行われたもの。

●韓国の学生らと国際交流ワークショップ

韓国・嶺南大学校と全北大学校の学生・教職員二十三人が一月九～十三日に来校し、明大・文化学園大の学生とともに国際学生交流ワークショップを行った。

来校初日の九日は、日韓四大学の学生を交えての歓迎会を駿河台キャンパスで開催。翌十日からは、日韓混合の六チームに分かれ、東京・横浜・鎌倉で日本文化や観光地などを取材した。そして、この取材で撮影した動画や写真、駿河台キャンパス内のスタジオで撮影した素材を使って、五～十分のプレゼンテーション・コンテンツを制作。十一日にその成果を発表した。日本人学生の大半はこうしたコンテンツ制作に初挑戦だったが、日本語・韓国語・英語を駆使して韓国人学生とコミュニケーションを取り、楽しく交流した。

●日本・カナダの学生が「高齢化」をテーマに交流・発表会

明治大学は二月十五～二十三日、「日加学術フォーラム」を開催。日本・カナダの学生各十四人の計二十八人が参加し、「持続可能な未来をどう築くか―高齢化に直面する日加の課題」をメインテーマとして、英語による講義や、グループディスカッション、フィールドワークなどを行った。

このフォーラムは、日加戦略的留学生交流促進プログラム（JACAC）が運営する短期学生交流プログラム。日加コンソーシアム加盟大学の学生が参加し、講義や討論、ワークショップを通じて両国の課題を検証、解決策を探るほか、学生同士の交流を深め、両国の相互理解を促進する。

●グローバル30総括シンポジウム
「国際化で大学は変わったか」

文部科学省「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業（グローバル30、以下G30）」の採択大学十三校は二月十四日、ホテル日航福岡（福岡市博多区）でG30総括シンポジウム「国際化で大学は変わったか」（文科省共催）を開催。大学や政府、企業の関係者ら五百人超が参加し、熱気ある議論を展開した。

このシンポジウムは、今年度末でG30が終了するのを前に、同事業採択大学が実施してきた取り組みや今後の課題について検証し、日本の大学全体の国際化に活かそうと開かれた。

●アイロボット社CEOが特別講演

理工学部は二月十九日、世界にブームを巻き起こしたロボット掃除機「ルンバ」で知られるアイロボット社のCEO（最高経営責

任者）で創設者のコリン・アングル氏を招き、「これからロボット産業を担う君たちへ」と題した特別講演を生田キャンパスメディアホールで開催した。同氏は会場を埋めた約三百人の学生らを前に、ルンバ開発に至るまでのエピソードも交えながら、「失敗は成功の一部だ」などと熱弁を振るった。

講演でアングル氏は、これまで多くのロボットに関する事業を立ち上げては失敗してきた経験を告白した上で、「成功する起業家も、ほぼ全員が何度も失敗している。十回のうち一回しか成功しなくても、その一回が千倍の利益を生むかもしれない」と語り、「完璧なプランがなくても、とにかく始めてみればいい」と学生らに起業を勧めた。

●留学生と小学生が国際交流

国際日本学部国際交流学生委員会の学生と留学生が二月十四日、東京・中野区立緑野小学校を訪れ、六年生約八十人と国際交流を楽しんだ。今回の交流は、昨年十二月に本学中野キャンパスで行われた「多文化共生フォーラム」内での提言をきっかけに企画されたもの。同委員会と小学校側が連携し、今回の開催に至った。

●女優・秋吉久美子さんらが世界遺産・熊野の魅力を語る

明治大学と和歌山県新宮市の連携による第七回熊野学フォーラム「熊野は0（ゼロ）だぁぁー！～何事を我に語るや～」が一月十八日、駿河台キャンパス・アカデミーホールで開催された。同フォーラムは、熊野地域の自然・歴史・文化をはじめ、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」について首都圏在住者に理解を深めてもらうことを目的に開催。女優の秋吉久美子さんも専門家らとともに出演し、熊野の魅力を語った。

●国際大と共同シンポジウム

国際総合研究所は一月十七日、駿河台キャンパスのグローバルフロントで、国際大学研究所との共同シンポジウム「アジアにおける安保・経済開発・人権の諸問題」を開催。会場を訪れた明大生や一般など約四十人と、歴史や外交、経済などさまざまな角度から議論を深めた。

●国際大学と図書館相互協力の調印式

明治大学と国際大学は一月八日、図書館相互協力に関する申し合わせの調印式を駿河台キャンパス図書館長室で行った。この調印は二〇一一年三月、両大学間で締結した大学間交流に関する包括協定書に基づいたもので、明大からは金子邦彦図書館長（情報コミュニケーション学部教授）、国際大からは加藤竜太副学長らが列席した。

●第九十回箱根駅伝　明大は総合六位

第九十回東京箱根間往復大学駅伝競走が一月二～三日、東京・大手町からの箱根・芦ノ湖を往復する十区間二百十七・九キロのコースで行われ、体育会競走部は総合記録十一時間十分〇九秒で、昨年を上回る六位となり、六年連続で次大会のシード権を獲得した。

●学生氷上競技選手権で男子総合優勝

体育会スケート部は、一月五～九日に北海道帯広市で行われた第八十六回日本学生氷上競技選手権大会で、二大会ぶり五十四度目の男子総合優勝を果たした。

男子総合はアイスホッケー、スピードスケート、フィギュアの合計点で順位が決定する。明大はフィギュアで一位、アイスホッケーで二位、スピードスケートで六位だった。

●全日本学生ロードレースカップシリーズ

全日本学生ロードレースカップシリーズの総合表彰式が二月十六日、明治神宮外苑であり、体育会自転車部の金井誠人選手（法3）が通算十二戦で二〇〇ポイントを獲得し、総合優勝を果たした。明大自転車部員の総合優勝は昨年に続き二度目。　同日開催予定だった同シリーズ最終戦の第八回明治神宮外苑大

学クリテリウムが雪のため中止となり、同大会以前の成績に基づき、表彰が行われた。

●ソチ五輪
コーチ・監督として明大校友も活躍

第二十二回冬季五輪ソチ大会が二月七～二十三日（現地時間）に開催された。明大関係者は、日本選手団の総監督として日本スケート連盟フィギュア委員長も務める伊東秀仁氏（一九八四年政経卒・体育会スケート部フィギュアスケート部門監督）、スキーノルディック複合の監督として成田収平氏（一九八七年政経卒・体育会スキー部監督）、スキージャンプのコーチとして横川朝治氏（一九八九年政経卒・体育会スキー部コーチ）の三人が参加。国外開催の冬季五輪としては過去最高となる八個（金1、銀4、銅3）のメダルを獲得した日本勢の活躍に大きく貢献した。

◆駿台トピックス

●第二回「若手の意見交換会」を開催

二月十八日に人形町今半・上野広小路店にて「連合駿台会　若手の意見交換会」が開催されました。今回は昭和三十年生まれ以降の若手（?）会員の皆さんに加え、新入会員ならびに役員など三十四名が参加しました。

まず圷専務理事より「連合駿台会の歴史と役割」と題した卓話がありました。連合駿台会として十年、前身の茗水クラブからは六十年を迎える当会の歴史について、エピソードを交えてお話しいただき、会員同士が会話することで、お互いを磨きあって欲しいとのお言葉がありました。それに続き山口会長からも「先人たちの高い意志でこの会はできた。母校を良くするために活動してほしい」とのコメントもいただきました。

その後の懇親会では、人形町「今半」の美味しいすき焼きを食べながら会員同士の交流で盛り上がりました。この会のために滋賀県、青森県、宮城県からも会員が参加され、和気あいあいのうちお開きとなりました。

◆駿台懇話会出席者

○明治大学ご招待者

日髙憲三、福宮賢一、飯田和人、針谷敏夫、平井克彦、中村義行、山上雅隆、伊藤光、山本昌弘、藤江昌嗣、長尾進、林義勝、早瀬文孝、石川幹人、飯田年穂、金子邦彦、横井淳子、髙山茂樹、小野寺幸子、奥住賢二、富樫芳勝、竹中克久、矢野健太郎、小池裕也、賀来華江、中村利廣、山田道郎、下坂陽男、矢ケ崎淳子、吉村武彦、友野典男、本橋正美、古谷英二

（敬称略）

○会員出席者

相澤淳一、青木幹則、秋山隆敬、浅井宏、阿部倫明、同ご友人、新井久晴、有賀隆治、石川均、石橋良一、伊東正博、伊原敏雄、岩田守弘、上西紘治、潮田伊佐夫、宇田川雄弘、内田八郎、大原幸男、大前実之、大村託現、大山卓良、岡本満夫、小野寺弘三、笠井正弘、苅部彰夫、河合秀二郎、河村博、神沢瑞至、木下重次郎、日下豊顕、小島清治、小谷野正道、小山修、斉藤春夫、斉藤弘之、齋藤柳光、佐藤和正、佐藤健、佐藤利文、眞田瞳、澤野太嘉嗣、椎名茂樹、杉浦伸二、関根均、宗邦雄、園田英次、髙澤徹、高橋一夫、武田宣夫、谷慈義、辻嘉右エ門、天童美徳、同ご友人、富水流孝二、中川敏洋、中村欣治、中村豊、並木洋一、西崎誠次郎、西本秀伸、西山武夫、二宮充子、二宮忠、橋口隆二、長谷川進一、馬場範夫、原田榮、平川清、比良田幸雄、福田和彦、福山紘太郎、藤代耕一、前川一郎、眞壁八郎、松崎優子、摩尼和夫、丸山律夫、水野智史、向井眞一、向殿政男、村岡健、山口政廣、山田朝彦、吉村國廣、渡辺紀之